

Title	戦争と金融：日清戦役における金融情勢
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1947
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.40, No.2 (1947. 2) ,p.51(1)- 68(18)
JaLC DOI	10.14991/001.19470201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19470201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19470201-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平井新著

B 6 每 價 二 十 五 圓 丁 三 圓

# 社會主義と共產主義

(新刊)

— 初學者のために —

誰もが一應は口にする社會主義と共產主義、この二つの理論に關する正しい知識を、讀み易い形で受入れようと欲する諸君のために、隨筆風に書かれた本書が實現した。

社會階級の本質は何か、プロレタリアの起源は如何、何が人を社會主義者にするか、社會主義實現のための「明るい道」「暗い道」とは何か、唯物史觀の公式とは何か、唯物辯證法の語源は、意味は、歴史は？ 社會主義の國家觀には如何なるものがあるか、アジア的社會とは何か、プロレタリア國家の性格は何か、サンヂカリズムの語義は如何、「ゼネスト」の語源は？、サボターヂュの意義は？、第一インターナシヨナルは何時成立したか、修正主義とは何か、西方左翼とは何か、コミンテルンは何うして成立したが、ファシズムと何う闘つたか、これ等に對して、本書の著者は極めて平易に、而も正確に答へるであらう。

慶應出版

## 戦争と金融

— 日清戦役における金融情勢 —

野村兼太郎

戦争と金融とが密接な關係にあることはいふまでもない。戦争にとつて第一に必要なものは金である。金なくして戦争を實行し得ないとまでいはれてゐる。スペインの無敵艦隊がフロレンスの銀行家の金融を得なかつたために、そのイギリス討伐を延期せざるを得なかつたことは有名な話である、かく金融が戦争に重要であることは今日と雖も變りはない。殊に金融が經濟組織上重要な地位を占めるやうになつた近代戦においては、金融は常に重要な地位を占めざるを得ない。

他方戦争は金融に對して大きな影響を與へる。戦争に依つて生ずる物資の一大消耗は平時の經濟機構に大きな變化を與へることはいふまでもないが、同時に戦争から生ずる不安、殊にその將來への見通しが困難であるために常に幾多の社會的不安を生ずる。元來戦争は二つの勢力が伯仲すると豫想される時に多く起るものである。勿論それは豫想であつて、客觀的に測定されたものではないが、一方の勢力が絶對的に優勢である場合には戦争は起り得ない。少く

戦争と金融：日清戦役における金融情勢

一 (五二)

とも双方とも勝つ見込みの存することが必要である。従つて戦争の開始當初においてはその勝敗は容易に豫測し得ないのが普通である。しかもその勝敗の如何に依つては國民全體の生活も、又各個人の生活も全く異つたものとならざるを得ないのである。さうした將來への見通しの困難さが生ずる不安に對し金融界は最も敏感である。

戦争に依つて生ずる金融界の變動は單にその投機性に依る將來への不安だけではない。戦争によつて消耗される軍需品への大需要が平時における生産の均衡を打破すると共に、戦費の一般市場への流入が一部の社會層の購買力を増大し、金融界に多大なる影響を與へる。それは通常戦争景氣を生み出すのであるが、それは決して全般的に均衡を得た景氣ではない。一方において價格の騰貴、賃銀の高騰をみるが、他面において價格の下落、失業者の發生をみる。換言すれば平和産業から軍需産業への轉換が戦争の程度に依つて大小の差はあるが急速に始まり、そこに過渡的混亂を生ずることを免れないのである。かつ再生産に向けられない巨額の物資の消耗が戦時・戦後を通じて不均衡な經濟状態を生ずる。かかる情勢に對して金融機關が如何に對處するか、又政府當局が如何なる政策をもつかは微妙な、かつ重大なる影響を國民生活に及ぼすことになるのである。

かうした戦争と金融との密接な相互關係は一方その國の經濟的發展の段階如何、國民生活の程度、國民性の如何等に依據すると共に、他方その戦争の性格、勝敗の歸趨、第三國との關係如何等に依つて影響されるものであるから、實際においては極めて複雑な現象として現はれざるを得ないのである。前述したやうに戦争に依つて將來への見通しがその戦争の結果如何に係ることから、民心が一種の戦争心理に支配され、平常ならば問題にならぬやうな些細なことにも影響される。そのために一層複雑化されるのである。今これらの點を日清戦役に際して現れたわが金融界の状態について例示して見ようと思ふ。

## 二

日清戦役當時のわが國の經濟状態は未だ極めて幼稚な段階にあつたといはざるを得ない。明治維新以後、歐米の生産組織を急速に攝取して資本主義化の道程にあつたといふものの、未だ極めて低い程度に過ぎなかつた。殊に最も問題となつたのは資本の不足であつた。機械生産の發展に最も必要なものは資本であるが、當時の金融界の程度では極めて不充分であつた。勿論すでに銀行業務も明治九年の國立銀行條令の改正以來漸くこれに習熟し、私立銀行も國立銀行新設制限と共にその數を報加したが、しかもなほ明治二十六年になつても、全國の銀行數七百三、公稱資本一億一千萬圓餘、預金五千五百萬圓餘、貸出し一億一千五百萬圓餘の程度に過ぎない。

しかし一般に歐米産業の移植については朝野を擧げて熱心であり、これに對する努力は十分に看取し得るものがある。殊に西洋先進諸國におけると同じく鐵道布設については相當強い熱意をもつてゐたやうである。しかしそれとも未だ創業時代に屬し、明治二十五年六月二十一日鐵道敷設法が公布せられて漸く整備の域に達したに過ぎず、その開業線路の哩數も同年において官線五百五十哩餘、私線一千三百二十哩餘、合計一千八百七十哩餘に過ぎない。その後鐵道事業の重要性を認め、急速に擴張する必要から資本に對する要求はいよいよ大なるものがあつた。議會に鐵道公債法案の提出せられたのも、これがために外ならない。

資本の不足は必ずしも國內に蓄積せられたる富の不足にのみ據るものではない。明治維新前における富のかなりの部分は浪費されてはゐたが、なほこれが蓄積され死藏されてゐたものが少くない。維新以後それらのあるものは資本化されたが、なほ地方豪家の死藏せる金銀も少くなかつたと考へられる。彼らは依然として古い封建的觀念からそれらを自身貯藏してゐたのである。換言すれば國內の金銀を盡く資本化し得るほどに信用の程度が高められてゐなかつ

たといへる。金融機關の未發達といふこともこれと關聯して考ふべきである。故に後に日清戦役に際し、戦時公債の募集されると共に、彼らの愛國心を刺戟し、これら死藏せる金銀が金融市場に現はれるに至つたのである。

國內資本の不足は外債に依つて補はれ得るのであるが、國內資本の場合と同様の理由、即ち信用の不十分なきことがこれが調達を困難にしたし、又外債亡國の思想も當時決して勢力なしとはいひ得なかつた。事實わが國は未だ農業國の域を脱してゐなかつたのである。例へば明治二十六年のわが國稅收入をみても、その五割七歩以上が地租であり、金額にして三千八百萬圓を占めてゐる。これに次ぐものは酒稅の一千六百萬圓であり、他に一千萬圓を超えるものは一つもなかつた。

資本の不足と勞銀の低廉とはわが國の産業革命を當然遅延せしめざるを得なかつた。僅かに紡績業方面に發展し得る程度であり、主要なる産業は依然して生絲・茶等であつた。かうした幼稚な程度ではあつたが、維新以來わが國が向ひつゝあつた方向は明かに資本主義制度の確立にあり、又これが確立に努力しつゝあつたのである。このことは又一般に經濟界の信用が次第に増大し、漸くある程度の安定さを生ずるに至つたことからも認められる。即ち東京銀行集會所の調査に係る東京府下同盟銀行貸付金の利息の變化は次ぎの如くである。

西南の役るの他政治的不安から「上一下はしてゐるが、大體において金利は資本の不足にも拘らず低下する傾向を示してゐる。殊にこれを江戸時代、明治初年の金利と比較すれば次第に金融の合理的になつて來たことが窺はれる。要するに明治新政府の政治的安定と資本主義制度への順應とに依つて一應の社會的均衡を生じつゝあつたのである。しかし大體の目標は定まつたといふものの、前途にはなほ幾多の問題があり、その資本主義化も前述したやうに、ただその端緒に過ぎずそれだけ他面からみれば將來への希望は大であつたのである。

前掲金利の表中、明治二十六年において特に著しい低下を示してゐるのは、當時における特殊の金融事情に基づくものであつて、今、日清戦役中の金融情勢を明かにせんとするに際しても、一應戦争直前の状態を説明して置く必要がある。明治二十七年二月十七日、日本銀行總會における川田日本銀行總裁の演説中にも、その前年の金融界を批評して「至閑より至繁に移り、而して其推更の際甚急激なりし」といひ、金融市場の變遷甚だしかつた旨を指摘してゐる。

次に少しくこれらの事情を検討しよう。

三

明治二十六年のわが金融界の事情はこれを國外及び國內の兩方面から觀察しなければならぬ。最初に對外關係から觀察しよう。

わが國の主要輸出品が生絲と茶とであり、その主要市場がアメリカ合衆國であつたことも敢て數字を掲げて説明するまでもあるまい。従つて合衆國における經濟狀勢が直接間接われに影響することは

年	最高	最低	平均
明治六年	一、八〇〇	一、〇〇〇	一、四〇〇
同 七年	一、五〇〇	一、一〇〇	一、四〇〇
同 八年	一、八〇〇	一、〇〇〇	一、四〇〇
同 九年	二、四〇〇	一、五〇〇	一、五三〇
同 十年	二、一〇〇	一、二六〇	一、二六〇
同 十一年	二、〇〇〇	一、二二〇	一、五一一
同 十二年	二、〇〇〇	一、二四〇	一、六三〇
同 十三年	二、一六〇	一、二七〇	一、七五〇
同 十四年	二、四〇〇	一、三四〇	一、六八〇
同 十五年	二、一〇〇	一、四一〇	一、六七〇
同 十六年	二、〇〇〇	一、三六〇	一、〇八〇
同 十七年	二、四〇〇	一、三〇〇	一、五八〇
同 十八年	一、二〇〇	一、〇八〇	一、一四〇
同 十九年	一、〇〇〇	八三〇	九二〇

戦争と金融—日清戦役における金融情勢

明治二十年	九八三	七六五	八七五
同二十一年	一、一〇五	八二八	九六七
同二十二年	一、二二六	九一一	一、〇一七
同二十三年	一、一三六	九六四	一、〇五〇
同二十四年	一、〇二九	八五二	九三九
同二十五年	九〇一	七七〇	八三七
同二十六年	九〇九	五六五	七〇八

(自一月至十月平均)

明かである。合衆國において一八九三年(明治二十六年)の恐慌はその西部にあつては未曾有の惨状を呈したといはれるほどのものであり、百五十八の国立銀行百七十二の州立銀行、百七十七の私立銀行四十七の貯蓄銀行、十三の信託會社及び十六の土地建物抵當會社を破産せしめた

(W. W. Jennings, "History of Economic Progress in the United States," 1926, p. 543) 合衆國のこの經濟状態はわが國にも影響し、同年の生絲の賣行不振となり、生絲の滞荷は數萬梱に達した。かうした影響を受けて、金融界は二十五年に引続き緩慢の餘勢を續けざるを得なかつたのである。

第二に問題となつたのは銀價格の下落である。當時におけるわが國の貨幣制度は名義上金銀複本位制度であつたが事實上は銀單位制度であつたといつてよい。貨幣法に規定せられた金銀の比價が實際の相場よりも小であつたために金貨は全然流通せず、一圓銀貨を中心とする銀貨のみが使用されてゐた。然るに銀價格は次第に低落の一途を辿り、明治二十六年には金一に對して銀二十六・五となつた。實際上銀本位制度であるわが國にとつて銀價格の下落は輸出に便利な筈であつた。然るにわが主要なる輸出先であるアメリカ合衆國における銀價格の暴落から生じた經濟的混亂が再びわが市場に影響せざるを得なかつたのである。他方輸入の方面においては輸入品が高價となり、企業に困難を感ずることになつた。しかしこれらの影響はあまりに過大に評價することは出来ない。銀價格の下落は全體としては

むしろ資金の需要を増加した傾向がある。かつ輸出を容易ならしめ、合衆國の恐慌にも拘らず順潮であり、殊に上半期においては一月より四月までの四ヶ月間に五百五十二萬圓餘の金の流入をみた。

以上の對外的影響は極めて複雑であり、一方企業の發達を抑制する要因もあり、他方これに反する要因も含まれてゐる。このことが又明治二十六年度の金融界をして閑散繁忙の兩極端に變化せしめた所以であらう。即ち上半期においては前年來の恐慌の餘波を受けて、全般的に沈滞してゐたが、金利の低下は企業心を刺戟し、幾多の計畫は企てられてゐたのである。上半期における日本銀行の預金は六百萬圓以上となり、又政府の公債償還期に當り、その償還高は三四月兩月中に二千三百萬圓以上に及び、殊に六分金祿公債、金札引替の兩種合せて一千二百二十萬圓は整理公債に交換することを停止されてゐたから、すべて現金として市場に出たことになる。従つて各銀行共利子を引下げ、貸出しを奨励せざるを得なかつた。日本銀行が同年五月三十一日に改定した貸附日歩一錢二厘といふのは創業以來の低歩であつたが、市中銀行の如きはさらにそれを下廻るといふ状態であつた。大阪手形交換所の割引日歩の如きは一時ではあるが五厘といふことさへあつた。

かかる情勢を以て下半期に移つたのである。幾多の企業が豫てから計畫され、むしろ資本を得るのに苦んでゐたのである。金融の緩慢がその極に達し、遊資が存するといふことになれば、當然それらの事業が企圖せられざるを得ない。鐵道公債を始め、鐵道その他の諸會社の増資、社債の募集が好成績をみたのは當然であらう。その結果はそれだけでも十分金融の繁忙をみるに足るものであつた。加ふるにここにシヤアマンズ法の購銀法條項の廢止から銀の低落並びに合衆國における金融恐慌の再來をみるに至り、恰も生絲製茶の輸出期に當つてゐたので、その影響は少からざるものがあつた。即ち一方企劃せる事業のための輸入品は銀暴落のため高價となり、他方輸出品たる生絲・茶は市場

不況のため滞貨となつた。その結果金銀の流出は當然惹起せざるを得ない。五月以降年末までにその額は六百六十二萬圓以上に達した。かくして利子は再び引上げられ、金融繁忙のうちに明治二十六年を送つたのである。従つて明治二十七年になるや、人人は金融界の情勢に對して多少の不安を感じてゐたやうである。即ちこのまま推し進めば金融繁忙の度を越え、逼迫の期の到来することは必然とみただからである。事實明治二十七年上半期の貿易状態をみると、輸出入共増額し、前年上半期の輸出入品總額八千二百一十一萬四千六百六十一圓に比して、二千五百五十三萬七千六百四十五圓の増加をみたが、輸入は輸出に比して著しく増額し、輸入超過六百五十三萬九千五百九十二圓となつた。それら輸入品目のうち當時の鐵道建設熱を示すため、汽車鐵道機關其他附屬品の兩年度上半期の輸入額を比較表示して置く。

品目	明治二十六年	明治二十七年
汽車及附屬品	二四〇、八二〇圓	一、〇七七、二九九圓
道鐵及道鋼	一九一、七〇九圓	四五二、一九四圓
汽車汽器類	七三、九三四圓	七四、七二九圓
合計	五〇六、四六三圓	一、六〇四、二二二圓

前年度に比して三倍以上の輸入は銀價格下落を勘定に入れても、なほ鐵道企業熱の高まりつゝあつたことを示すものであらう。然るに全體として金融界は穩かであつた。未だ何ら逼迫の状態を呈してゐない。これは一方民間における遊資の存在が少くなかつたことと他方政府より引續き下付された資金の民間に流入したことによるものであらう。加ふるに信用の増大がさらにこの事情を援助したとみられやう。明治二十六年度東京手形交換所の手形小切手交換高は一億四千八百一萬圓餘であつて、前年度より三千四百二十四萬圓を増加してゐる

しかし手形交換所は明治十二年に大阪において始めて設立され、東京においては明治二十年末に開設されたものであり、日本銀行當座勘定を以つて交換差額の振替決済をなす方法は、明治二十四年三月末に始めて東京においてのみ開始されたのであつて、大阪では未だ開始されてゐない。大阪で開始されたのは明治二十九年四月である。その交換高が増大したといつても、これを後年に比すれば僅かなものである。これを日露戦役の前年、明治三十六年における東京、大阪、神戸、京都、横濱、廣島、名古屋の七交換所の交換高三十五億九千萬圓に比較しても極めて僅かなものに過ぎないことが解る。ただ日清戦役直前のわが經濟力がらみて、この數字に多少の意義を認め得るのである。

民間に相當の資金があつたことは、前述した死藏金銀を別としても考へ得る。即ち生絲・茶・雜貨等に投ぜられた資金は廣く民間に散布され、地方人の手にはいつてゐたからである。それらは内地購買力として潜在的な力となつてゐた。生絲・茶等の輸出の一次的滞貨も直接にはそれらの人人に影響を與へなかつた。むしろそれらの購買力の存してゐることが、それらの商品の滞貨を救済した傾向さへ存したのである。加ふるに明治二十七年になると、合衆國の經濟界も漸次に落着をみせ、前年の滞貨の生絲及び春挽絲の賣却さるる見込みも立つて來た。かつ當春以來、公債償還、公債利子の下渡、水害補助費(六百萬圓)の下附等に依つて約一千萬圓程度の資金が民間に流入することになつた。それらは多少とも金融を緩和してゐたことを認められる。

しかしそれらは一時的のものに過ぎない。全體として種種なる企業に著手され、殊に固定資本を多額に必要とする鐵道事業に投資せらるるとすれば金融の逼迫をみることは當然である。かつ當時鐵道の利益は漸く増大し、鐵道株は騰貴の現象を示してゐた。明治二十六年度に假免状を受けたものに太田、兒島、初瀬、南豫、道後、浪速の六鐵道、免許状を得たものには佐野、奈良、播但、南和、房總、太田、道後、南豫、浪速の九鐵道がある。明治二十七年度に

は京都、阪鶴、紀和、紀攝(二十八年南海と改稱)、下總(二十八年成田と改稱)、近江、北越、酒田、高野、中國、城河、上野、豆相、加能(二十九年七尾と改稱)、磯湊、西成、中越、伊賀、豊川、勢和の二十鐵道が假免状を受け初瀬は免許状を得た。もとよりこれをその以後の發展に比較すれば必ずしも多大であるといふことは出来ないが、これを當時の金融界からみれば、相當大なる影響あるものとみななければならぬ。

かうした状態にあつたために、金融の逼迫を恐れて、私設鐵道の許可を制限せんとする議論さへ出たのである。(自由主義的立場に立脚する田口卯吉は明治二十六年十二月二十三日の「東京經濟雜誌」に「私立鐵道の許可を制限して金融必迫を救はんとの謬見」と題する一文を公にしてゐる)。實際上各銀行の手持資金は次第に缺乏を告げて來たので二十七年上半期末に近づくにつれ、表面特に逼迫の現象がないにも拘らず、否むしる税換券流通高も發行高も減少してゐるにも拘らず、三井、第一百十九、第一等の屈指の銀行が何れも金利の引上げを發表したのである。

以上述べたやうに日清戦役の惹起する直前において金融界は特に表面上不穩の情況はなかつたのであるが、前々年からの金融緩慢の後を受けて、企業熱の勃興せんとする氣配を示してゐたのである。従つて諸所に投機的傾向の現はれつつあつたことは十分認められる。明治二十七年四月十七日の時事新報紙上には「小投機を制するは大投機を行ふにあり」と題する論說中に、次ぎの如き興味ある一例を掲げてゐる。

「今日の投機社會を見れば恰も小跋扈の時代にして、例へば彼等の株券を賣買するや、市場の形勢を觀察して、眞實自家に餘るものを賣り足らざるものを買ひ、以て商況の浮沈を待つに非ず、唯賣買の聲を大にして一時の外觀を裝ひ、數理外の相場を製作して其間に奇利を制せんとするものに過ぎず、中にも鐵道株の賣買の如き著しき例にして奇計の最も奇なるものと云ふ可し、近日上方地方より傳ふる所を聞くに、或る私立鐵道會社にて工事最中未だ開業の運びに至らざる其前には評判甚だ宜しくて五十

圓拂込の株券が次第に騰貴し、九十何圓まで飛揚りて上々の景氣なりしが、工事落成して開業するや否や俄に不味の勢と爲り、凡そ三十圓前後の下落を呈したる其魂膽は全く小投機者輩の策略に出でたることにして、兼てより竊の株券の買占を行ひ、頻りに前途有望の評判を言觸らして直段を釣上げながら、開業の前後に至り巧に賣抜けて、恰も會社を置去りに打捨て、跡は野となれ山となれの始末を演じたる其後に遺されたものは一時の評判の爲めに只譯けもなく株を買ふたる眞面目の新株主のみにして株券は下落し前途の見込は分明ならず只管當惑の有様なりと云ふ」

この種の投機が企業熱に附隨して生ずることは先進諸國においても多くみられるところであり、敢て珍しいことではないが、それらの多く行はれることは危機を胎むものである。このことを見通すことは出来ない。諸銀行が利子の引上げをなしたことは、恰も生絲取引に近づく季節であり、他方又朝鮮の風雲は漸く危機を告げんとしてゐたからでもあるが、企業熱から生ずる投機を幾分でも緩和するに役立てんとする警戒氣分もあつたのであらう。かくして金融界は戦争に當面したのである。

四

日本が清國に對して宣戰を布告したのは明治二十七年八月一日のことであるが、日清兩國の間に危機を胎んでゐたのはすでに四月朝鮮に東學黨の亂の勃興した頃からであつた。しかし未だその頃にはこの事件が兩國の戦争にまで擴大するかどうかといふことは一般には考へられてゐなかつた。朝鮮だけの事件として解決されるかも知れなかつたら、そのわが經濟界に及ぼす影響も殆どなかつたといつてよい。然るに六月に入るや、日本駐劄清國公使は朝鮮國王の請に依て清國が兵を朝鮮に派遣する旨を知照し來たり、われも亦大島義昌指揮の下に混成旅團を渡海せしめた。かくして戦争に對する懸念は漸く増大して來たのである。

當時における日清兩國の國力を比較する時に、この戦争は日本にとつて容易ならざるものであつたことを知り得る。少くとも表面上であつたにしてもアジア第一の老國たる清國を未だ弱小國と思はれてゐた日本が容易に打破し得るとは誰も考へてゐなかつたのである。假令朝鮮その他において日本の武力が歴例的に勝利を得たとしても、短日月の間にこの大國を降伏させ得るといふ見通しはなかつたのである。それだけ戦争に對する不安は強かつたといはなければならぬ。

かうした戦争不安に對する影響は六月頃から隨所に現れ始めてゐる。軍事行動の開始せらるるや、船舶の不足を生じ、貨物の運輸が滞滯し、金融が思ふやうに出来なくなつた、北海道においては一部銀行が貸出しを中止したため、商人間に信用が行なはれず、問屋の如きは業務休止の状態にあつたといふ。七月二十五日豊島沖の海戦があり、八月一日宣戰の詔勅が下るや、清國市場をその主要なる對象とする海産物、燐寸等を始め、紡績業の如きも輸出杜絶の恐れから業務を縮小するに至つた。これが單に杞憂に過ぎなかつたことは却つて清人との取引が間もなく増大し、業界の復活をみたのでも解る。要するに戦争に對する豫測の困難から生ずる一時的動搖に外ならない。しかしかかる状態はそれらに最も敏感な金融界に影響せざるを得ない。銀行業者は何れも慎重な態度を採らざるを得なかつた。この金融界の態度を時事新報記者は銀行の籠城主義と題し、八月五日の紙上に次の如く批評してゐる。

「銀行は今や其營業の方針として殆ど籠城主義を執るもの如し、即ち貸出し極めて確實なる抵當、若しくは充分の信用ある人に非ざれば之を謝絶し、株式の抵當は殆んど之を拒絶するに勢ひにして、其既に抵當となり居るものは成べく引出さしめて危険を免かれんとするに汲々たるもの如く、隨つて日歩の高張るは勿論のことにして、總じて此際利益せんよりも寧ろ損失を受けざらんことに注意せり、斯く銀行が引込思案を出したるものは言ふまでもなく日清事件の金融上那邊にまで影響を及ぼすべき

や推測すべからざるに原因し、日本銀行の如きもいつ何時再割引を謝絶するに至るやも知るべからざるより、同行とて大にアテにならざれば、今は銀行自身にても自ら覺悟せざる可らざるの事情なるを以て、偕こそ籠城主義に傾きたるものなりと云へり」勿論すべての銀行がこの態度を採つたわけではあるまいが、すでに手許資金に乏しくなつてゐた銀行が戦争のため警戒気分になつたことは認められる。金融の引締りは當然一般市況も不況となり、株式の如きも下落一方に傾いてゐた。すでに株式の如きは六月下旬日清兩國の出兵、危機迫ると共に、二十五日には暴落を來だし、立會を中止せざるを得なかつたのであるが、その後十分に恢復し得ざる状態にあつた。

しかしかかる状態は戦争に據る衝擊と不安とから生じたものに過ぎず、やがて戦時經濟の向ふ道程がはつきりすると共に、これに即應する態勢が採られるのが普通である。戦争に必要な産業の繁榮と軍事費等の支出に據る流通貨幣の増大とが前述の如く所謂戦争景氣を生み出さざるを得ない。すでに第一回の軍事公債三千萬圓を五分利附で募集することが發表されるや、金融界は安定し、大阪交換所日歩の如きも三錢一二厘から二錢八厘に引下げられたのである。加ふるにわが軍の連戦連勝、生絲の賣行き良好なること、日英條約改正成立等の好材料に依つて株式は持ち直し、漸次高騰するに至つたのである。しかし戦争の終結は未だ豫測し得ず、九月十七日黃海の海戦で清國の北洋艦隊を潰滅させたが難攻不落を誇る旅順は未だ陥落しなかつた前半期においては著しい資金の需要は起らなかつたのである。しかも民間への資金の流出は顯著である。中央金庫保有高の減少は次の如くである。

右に依れば開戦以後急速に國庫金の流出をみたことは明かである、勿論その一部、百萬圓乃至百五十萬圓は船舶購入等のため硬貨で外國に流出したものであるが、残りの大部分は民間に流出したものとみななければならぬ。他方税換券の發行高及び流通高も左表の如く少しく増大してゐる。

五月二十八日—六月二日	四、七七六、八〇三圓
六月四日—六月九日	六、〇二七、〇〇四圓
六月十一日—六月十六日	一七、八〇六、〇九〇圓
六月十八日—六月二十三日	一七、七三九、五〇六圓
六月二十五日—六月三十日	一六、六七二、二二八圓
七月二日—七月七日	一四、四六七、三〇七圓
七月九日—七月十四日	一二、四〇二、二二一圓
七月十六日—七月二十一日	一一、四八一、一五四圓
七月廿三日—七月二十八日	一〇、二四六、三七九圓
七月三十日—八月四日	八、〇六八、五四〇圓
八月五日—八月十一日	缺
八月十三日—八月十八日	六、五二二、九四一圓
八月二十日—八月二十五日	五、八四一、四六九圓
八月二十七日—九月一日	六、〇八九、一九六圓
九月三日—九月八日	四、三八九、四九一圓

國庫金の流出の如く著しくないにしても、流通高は漸次に増加し一千萬圓以上を増加してゐるのである。

これらが民間に流出したことは多少物價に影響を與へてはゐるが、未だ顯著ではない。むしろ金融緩慢の情勢を示してゐた。軍事公債の發行は金融界に打撃を與へるかも知れないと豫想されてゐたのであるが、全然その影響は現はれなかつた。勿論それには日本銀行が軍事公債應募者に對し貸出しの便宜を與へる等多くの努力をなしたためであるが、これら流出せる貨幣は公債を消化するのに大いに役立つものと考へられる。

以上日清戦役中は金融界においてはむしろ平穩に經過したといつてよい。しかしその平穩は必ずしも實質的に平穩であつたとはいひ得ないのである。戦争直前に於いて一般に金融逼迫が豫想されてゐた。投機的傾向は漸く強くなりつつあつた。それが日清戦役といふ當時のわが國にとつて未曾有の對外戦争に當面したため、一時延期せられたのに過ぎないのである。戦争そのものに對する不安

日	發行高	流通高
七月二日—七月七日	一四一、〇六三、六三二圓	一一三、三四〇、二九七圓
七月九日—七月十四日	一三九、一四二、九三〇圓	一一六、〇九六、三二五圓
七月十六日—七月二十一日	一三八、一〇二、〇六三圓	一一六、二四〇、七〇九圓
七月二十三日—七月二十八日	一三八、二七五、三五七圓	一一六、一二〇、九三九圓
七月三十日—八月四日	一三九、五二六、一四二圓	一一七、五二八、九七八圓
八月六日—八月十一日	一三八、五六三、四七六圓	一一〇、九五九、六〇二圓
八月十八日—八月二十日	一三九、四七〇、六七二圓	一一〇、九四八、七九二圓
八月二十一日—八月二十五日	一三九、〇六三、六六八圓	一一二、四五七、七三一圓
八月二十七日—九月一日	一四〇、五六三、九三〇圓	一一二、七二二、一九九圓
九月三日—九月八日	一四一、二七三、五四九圓	一一三、九七四、七三四圓

利子を高くして、資金の蒐集に努めてゐたことは、一層この爆發を抑制する上に、與つて力があつたと思ふ。

五

この日清戦役中の状態は終末に近づくにつれて著しく異なつて來た。即ち明治二十七年十一月二十一日に旅順の陥落をみる頃から、漸く戦争に對する不安も薄らぎ、さらに講和談判の提議が齎されるやうになると、その最初の提議は條件不備のために一度拒絶されたやうなもの、戰勝気分は漸く横溢するやうになつたのである。しかし前述の如く金融業者の極度の警戒のために、むしろ靜穩裡にその年は暮れた。豫想された金融の逼迫もみられなかつたが、かかる状態が何らの影響なくして終る筈がない。漸く戰勝景氣が各所にみられ、將來の波瀾が豫想されるに至つた。

戦争景氣の状態は多少の程度の差はあるが各地において現れ始めてゐた。その最も極端に現れてゐたのは、二十七年九月に大本營の設置せられてゐた廣嶋であつた。明治二十八年一月二十五日の時事新報紙上に當地の状況を報じてゐるが、それらは甚だよくその状態を描いてゐるから、敢てその一部をここに抄出して置かう。

「廣嶋市從來の物品供給力は到底今日の需要に應ずべくもあらず、随つて物價俄然騰踊し、少きも一割、甚しきは五割の騰貴を來したるものあり、市中の商況は活潑を極む……」

「廣嶋市中の物價は前記の如く騰貴したれども、價に關せず騰貴の儘にてドン／＼賣行き、勞働者は賃錢の騰貴に拘はらず、雇ひ人山の如くなれば、商人も勞力者も囊中腰かにして、金融極で圓滑なり、隨て銀行の預け金は俄かに増加し、特に其金額の多からざる者増加したるは、同地方細民の如何に囊中に餘裕を生じたる歟を想見すべし……市況の活潑、市内の潤澤斯の如くにして物價悉く騰踊する中に就き、獨り甘藷の下落を來したること一の異觀なれども、畢竟細民の囊中豊にして其常食たる甘藷は俄かに擯斥せられ穀食に移る者多きより、該品に限り市中潤澤の割合に逆比例して、其價大に下藏したるものならんとなり、以て廣嶋市内目下の繁昌を想像すべし」

要するに大本營の存在と共に、國會もこの地に移り、文武百官もここに集り、雪夫も多く來たり、その間に戦争に依る利得を得んとする御用商人があり、かかる好況を二時的に生じたのであらう。しかしその反面において定額所得者の困窮を生じたことは當然であらう。

「廣嶋中の繁昌斯の如くにして市民の生計に豊なるに引替へ、一定の俸給に衣食する官吏の生計に艱むは一方ならず、物價は五割の騰貴を爲したるものあれども、自己の俸給は依然として前日に異ならず、然のみならず家は徴發されて、家内に五六名の軍人を容れ、之に對して諸事優遇せざるを得ずして、一家の生計俄かに平日に二三倍せり、高給のものは此苦痛に堪ふべきも、特に隣れむべきは巡查にして、七八圓の月俸に家内五六人の衣食を仰ぎ、物價の騰貴に逢ふて、既に困難を極むる際、家の一室は徴發されて一二人の軍人を宿せしむ、豫て職務上軍人を優遇すべしとて、徴發されたる家々に就き説諭を試みたる其當人が自

家に宿泊せる軍人に對しては、薄給の悲しさ如何ともする能はず、進退谷まりて、其職を辭するに至りたるものありとぞ」

その程度範圍に多少大小の差違こそあれ、戦争の生む經濟的不均衡は常に同じであるといへよう。かかる状態は廣嶋ほど甚しくはないが、大體各地において現れ、米價の如きも空前の高値と稱せられてゐる。

その間に戦争は順調に進展し、講和への途を急速に進んだ。二月二日に威海衛を占領し、同十二日には北洋艦隊は降伏し三月十九日には講和使節李鴻章が下關に來著してゐる。然るにその前日十八日に渡邊國武が大藏大臣から逡信大臣となり、松方正義が新しく大藏大臣に任せられ、特に「異日戦局を收むるに膺り財政を整理するは事尤も重要に屬し、朕が日々軫念する所なり」といふ勅語を賜つてゐる。その後松方は數ヶ月で辭任してはゐるが、戦争の近く終らんとするや、經濟界の變動は漸く顯著となり、一方貨幣制度確立の必要があり、他方戦後經營に多額の費用を要することが豫想されるに至つたが故に、特に松方を起用したのであつた。今それらについて論ずる必要はない。

要するに戦前ある程度までその萌芽を示してゐた經濟發展の趨勢は、一時戦争不安に依つて阻止されてゐたが、その戦勝の見通しがつくと共に再び急激に上昇し、これに伴ふ金融膨脹は戦後におけるわが産業の發展を豫想せしむるものがあつた。資本に對する需要も増大せんとする傾向が強かつた。そこには多くの危機を含むものではあつたが、幸ひにして下關講和條約に依つて償金二億兩、外に山東半島還附金その他を合せて二億三千五百萬兩を獲得し、かつ對外的信用も増大したため、ここにわが國の産業革命を完遂する基礎を立てることが出來たのである。

戦争から生ずる經濟的不均衡、金融不安もこの戦争においては局部的であり、程度も極めて輕微であつた。殊にその戦後における發展と比較すれば殆どいふに足らぬものであつた。戦争の生む幾多の經濟的慘害は確かにこの戦争においてもすでに現れてゐたにも拘らず、戦勝に依る經濟的好況に眩惑されて、戦争を安易に考へる風をすでに作りつ

つあつたのである。又確かに戦争がその後の経済的發展の要因の一つをなつたことも認められるが、それだけに依つてその後の経済的發展が可能となつたわけではない。ただあまりにも戦争が強き動因となつてゐたために、戦争の惨禍について正しい判断を失はせたのである。

(昭和二十二年一月二日稿)

## 経営民主化に關する若干の考察

小 高 泰 雄

終戦後に於ける我國産業經營が民主化の方向に従つて重大な變革を遂げつゝあることは云ふ迄もないところであるが、この變革過程がこれを二つの政治的施策を中心として行はれつゝあることは疑ひ得ないところであらう。即ちその一は軍需補償の打切に伴ふ擬制資本の整理を中心とするものと、二は財閥解體と獨占禁止を基調となるものである。軍需補償の打切に伴ふ一連の金融措置は云ふ迄もなく、産業再建に對して適正なる具體的資本價值と戦時中に極度に膨脹せる抽象資本價值との矛盾を修正する性格のものである。従つてこの適正具體資本價值の設定と抽象資本價值値切下に伴ふ犠牲負擔の中に重大なる問題がひそんでゐる。他面財閥解體と獨占禁止は、從來の持株關係を民主的基礎の上に置くとともに、不當なる競争の防止による自由競争制度の育成に關聯するものであつて、從來の産業構造に對して重要な變革を生ぜしめつゝあるところのものである。これ等の變革は今や其の途上にあるのであつて將來の産業形態が如何なる具體的内容を存するに至るかは何若干の期間の経過を待たなくてはならない。しかしながら、變革が從來の産業資本或は金融資本家間のみの問題たるのみならず、終戦以來急激に増大し來れる勞働階級の發言